



発刊のことば

徳島県立農業試験場長 山 本 勉

明治26年名東郡加茂名村に創設された農商務省農事試験場四国支場廃止のあとを承けて、明治36年に徳島県農事試験場が開設されてから今日までに80年の歳月が経過いたしました。

この80年の間に畜産、果樹部門の分離、独立、組織機構の改変、庁舎の改築、分場、試験地の設置あるいは廃止、本場の名西郡石井町への移転、農業機械化 センターの統合など幾多の変遷を経、一方では幾度かの事変や戦争に遭遇し、社会、経済の大きな波に揺られながらも終始一貫して地道に研究を続け、さらに技術員養成所や農業講習所、農業大学校農業分校を併設して、農業技術者や後継者の育成をも担当し、また普及制度が確立するまでは農家の技術指導にも当たるなど徳島県農業発展のために力を尽して参りました。今、往時の研究報告書をひもとくとき、西欧やわが国各地の作物、農法などを積極的に導入してそれらの改良や定着に意欲的に取り組んだ創設当時の情熱と真摯な姿に始まり、変貌するそれぞれの時代の農業情勢に対応するため、ひたすら本県農業の発展を願いながら幾多の困難に打ち克って黙々と研究を続けてきた先人達が、80年の歴史の中に積み重ねてきた貴重な業績と貢献に対し、深く頭の下がる思いがいたします。

時潮の流れは激しく、今日わが国の農業は厳しい社会、経済情勢の中で、国内的には米の過剰を基調とした水田利用再編対策がここ数年来強く推し進められ、明年からは第3期対策が展開されようとしています。また国際的には農産物の貿易自由化を迫る米国をはじめ諸外国の圧力が急速に高まりつつあって、農業全体の生産力の飛躍的な増強と農業の体質強化が強く叫ばれ、これに果す試験研究の役割に大きな期待が寄せられています。こうした厳しい情勢をふまえ、国では今革新的な技術として黎明期を迎えているバイオテクノロジーなどの先端技術の開発とその利活用をも図りながら、21世紀に向けて農業の生産性を飛躍的に向上させ、わが国農業の長期的な発展と安定、国民食糧の確保を期するとともに、多様化、高度化する消費、需要への対応、緑資源の維持、培養と環境の保全などを図るために先頃「農林水産研究基本目標」ならびに「農業関係研究目標」が策定され、農業関係試験研究機関の大幅な再編整備が行われたところであります。

こうした重要な時期に私共は、農業試験場が歩んできた80年の歴史をふりかえり、先人達の足跡をたずねながら、明日の徳島県農業発展の一翼をになう試験研究がこれから歩むべき確かな道を探り、示唆を得たいと願って史誌の編纂を企画いたしました。

編纂の経緯と経過は「編集後記」に詳しく述べられていますが、開設以来初めての史誌とあって、いざ着手してみると80年の歳月に散逸した資料も多く、また第2次大戦中と戦後の混乱期には資料そのものが乏しく、正確を期するには多くの困難を伴いました。しかし県内外の関係機関、および試験場の先輩をはじめ多くの方々から史実の裏づけとなる資料や記録の提供をいただき、ことに元農林水産省農業技術研究所図書課からは明治35年創刊当初から昭和13年まで730号に及ぶ膨大な「徳島県農会報」を借用させていただき、古い時代の本県農業の姿をかなり正しく知ることができたのは幸いでした。

資料の調査、執筆、編集は編集委員と幹事が中心となって進められましたが、多忙な本来の業務の上に重なる馴れない仕事とあって、その苦労は並大抵のものではなかったと思われます。しかしこれら委員、幹事を中心とする場職員の努力が結集され、ここに「徳島県立農業試験場八十年史」を刊行する運びとなりましたことは職員一同とともに大きな喜びであります。そして、この八十年史が明日の徳島県農業発展のために「故きを温ねて新しきを知る」一助ともなれば幸いと存じます。

終りに、本史誌編纂に当たり、貴重な資料を提供され、また助言やはげましを賜わった各位に深甚なる謝意を表するとともに、多忙な業務の中を精魂を傾けて資料の収集、執筆、編集にあたられた職員に対して心からその労をねぎらい深く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年12月